

# 平成二十二年度 書道講演会

## 日本のソフトパワー

～ 女手・ジャパンエキスポ・そして ～

株式会社日本国際放送 代表取締役社長

高 島 肇 久



高 島 肇 久 氏

平成 22 年 11 月 11 日  
於・国立新美術館三階講堂

いかもしいないけど、一生懸命努めるんだよ」とおっしゃっているんだなと理解し、本日、お話をさせていただくことに致しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にはあらかじめ勘弁をいただきたいというところで、これが私の冒頭のおわびでございます。

さて、今日、最初に取上げますのは、奈良の大仏様の足元から、明治時代に出土しておりました剣が、実は千二百五十年も行方不明になっていた正倉院の御物と判明したという話です。「釈迦に説法」になりますが、正倉院には聖武天皇が数々の宝物を納められ、何が納められているかは国家珍宝帳に記録されています。ところが、何点かは、徐物、除いた物という付せんが貼ってあり、行方知れずになっています。西暦七五六年に、聖武天皇のお妃の光明皇后が正倉院に納めた二振りの剣についてもその付せんが貼ってあったというわけです。

行方が判らなくなったのは七五九年、八世紀の中ごろでございますけれども、私の先輩に「日本人のスピーチはおわびから始まるが、外国では必ず軽いジョーク、しかも気のきいたジョークで始まる。そこで高島。おまえはせめてその域に近づこう努力しろ」と言う人がいました。それから何十年もたった今、またおわびから始めなければいけません。実は、私がこの書道講演会でお話することを家に帰って申しましたら、一番驚いたのは家内でございます。結婚して四十五年になりますけれども、私の悪筆につき合ってきた彼女は、「うちの亭主は最近物忘れがひどくなってきたけど、自分の字のことまで忘れたのかしら」と真っ青になったようにございます。私は小学校以来、書道の時間となりますと、苦しんだり、悲しんだり。二重丸というのはほとんどもらったことがなくて、いつも、黒い墨で書いたはずが、赤い筆で真っ赤かになった半紙が戻ってきたことを記憶しています。そんなわけで、文字について私が入様にお話できる資格は全くありません。それがなぜここに立つようになったのか。最大の理由は杭迫先生です。みずから筆をおとりに

なって、和紙の便せん四枚にご丁寧なメッセージをお書きになったのです。それを見た途端に「これはあかん」と。金縛りにあったみたいでした。

杭迫先生のお手紙は無眼の力のよいうなもを持ってメッセージが心にドーンと突き刺さってくるような感じでございます。皆さんもご承知のように、慈愛あふれるというか、穏やかというか、優しさに満ちたとか、そういう先生のお人柄、それから外見、それがそのまま文字にあらわれて、「高島、おまえは字がまず

れども、実はこの二振りの剣は正倉院から光明皇后によって持ち出されて、大仏の足元に埋められたということが、何とそれから千二百五十年たった今年わかったというわけでございます。このニュースを新聞で読んだ時、私は何とすばらしい文化なんだろうと興奮致しました。つまり、宝物を納めた、それが記録になっている。その記録の中に、徐物という付せんが貼ってあってその宝物が確かに棚からなくなっている。

その後明治時代になって、大仏様の足元を調べていた人がこの剣をちゃんと見つけて、当時から国宝になっていた。ところが今回レントゲンで調べたら、この剣は徐物に掲げられた剣そのものなのだということがわかった。その鍵はレントゲンの画像にあらわれた陰と陽という二つの文字だったという。これは本当にすばらしい発見でありますし、それからもう一つ。何と千二百五十年前に使われていた文字を、今の私たちが見ると「あ、陰だ、陽だ」とわかるといふ、文字というものは、本当に

すばらしい。私は文字について改めて畏敬の念を覚えた次第でございます。

というか、きずながあると改めて思った次第です。

皆様ご承知のように、日本の文字は中国から伝わりました。最初は漢字で伝わってきたわけで、今、日中関係大変ぎくしゃくしておりますが、でも、もとをたどれば、漢字というすばらしいものを通じて、日中両国は大変深いえにしで結ばれていると私は思っております。そのことを痛感いたしましたのは今から五年前に青島を訪ねた時です。日本と中国は若手官僚や民間企業、地方自治体の幹部、それに中国中央党校という共產党の幹部学校の学生が百人ぐらいずつ毎年行ったり来たりするという交流事業をやっております。私は五年前日本側の団長として、中国を訪ねたしまして、北京から、この間、地震があった四川省の成都という町を回り、最後に行ったのが青島でした。

海辺の高層ホテルのかなり上の階に泊まっておりましたが、夜が明けると窓から下を見ますとちょうど浜辺

の波打ち際のところ、竹竿のような長い棒を持って砂に漢詩を書いている老人の姿が見えました。実に達筆で、私には内容まではわからなかったんですが、上から勘定すると一行に七文字ありましたので、あれは多分、高校のときに習った七言古诗かなと思いついて見ました。翌朝もやはりその老人は来て、同じように漢詩を書いて、その漢詩がいつの間にか満潮になるとすっと消えていくという印象的な光景でした。また別な場所では、コンクリートのたたきというか、舗装したところに水で文字を書いている女性を見かけたりいたしました。その青島の老人ですが七十代後半から八十代と見受けられましたけれども、ひょうひょうと詩を書いているんですね。別にだれに見せるともなく楽しんでおられる。いやあ、すばらしいな。まだ朝も早く、浜辺を歩く人もほとんどいない静かな海辺で一本の棒で砂に詩を書く。私はただただ見とれるとともに、まさに中国と日本の間は文字を仲介とした強い強いえにし

実はこの旅もそうだったんですけども、私は中国の方々と宴会をする時に杯を交わす傍ら漢詩、中でも私の好きなお酒をテーマにした詩を手元の紙に書いて、「これ、御存知？」なんてやるがございます。言葉は通じなくても、それで大体意思の疎通は図られ友情をはぐくむことも可能なかなと思います。いや、そこまで行かないにせよこれをやりますと、大体「かんぺい、かんぺい」と言って、さらにお酒が進むということになるかと思えます。私が好きで良く書くのは李白の詩「両人対酌」です。二人でお酒を飲んでいて、山は花盛り、二行目がいいですよ。ね。「一杯、一杯、また一杯」、本当に酒飲みの気持ちがよくあらわれています。酒飲みというのはだんなわがままになりますから、三行目で「酔っぱらっちゃたよ。もう眠いからね、じゃあ、今日はこれでね」。最後がいいんです。「明朝、意あらば琴を抱いて来たれ」と。また楽し

いことをやろうじゃないかっていう、このすばらしい詩なんですけれども。大体宴も終わって、そろそろ眠くなってきたなっていうのでこれを書きますと、中国のお客さんは「それじゃあね」と言って帰してくれませう。実にいい詩でございます。この詩を手元のペーパーナプキンかなんかに書いて「実は、この詩は日本ではお酒の銘柄の一つなんだよ」と言いますと、皆びっくりします。

島根県の松江に、つい最近亡くなられたのですが、私の友人で日本酒をつくっている田中竹次郎という人物が書いて、その酒蔵がまさに「李白」という名前なのです。「両人对酌」という銘柄もちゃんとあります。NHKは二年前に「だんだん」という連続テレビ小説を毎朝放送しましたが、その舞台、ロケ先は、わが友人、田中さんの「李白」でした。さすがに「李白」とつけるわけにはいかなないので、ドラマでは「杜甫」とつけました。そこで、『杜甫』という名前の酒蔵を舞台にしたテレビドラマを放送したが、日本では『国破

れて山河在り』という杜甫の春望は良く知られている。日本の俳人芭蕉も「兵どもが夢の跡」と詠んで杜甫を思い出している、などと話しますと、中国の人々は驚嘆のまなざし。私ごときまでが日本文化水準の高さを披露できるという有難い話で、本当に漢詩というのはすばらしいと思います。

この漢詩ですが、日中のきずなを示す一つの有名な碑があります。西安の興慶宮という、唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛して、毎日のように楊貴妃と一緒に遊んだ場所として有名な公園がありますが、その中に阿倍仲麻呂記念碑と書いた碑がございます。この碑には百人一首におさめられた阿倍仲麻呂の「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」というあの一首が刻まれています。一体何故この碑ができていくのですが、西安と奈良が友好都市の縁組みをしてから、五年たった一九七九年に建てられたものです。この碑には「天の原ふりさけ見れば」という日本語の歌ではなくて、「翹

首望東天」で始まる漢詩が刻まれています。その反対側には「哭泉卿衡」という題の李白の詩が刻んであります。

どういうことだったのか。そのいきさつを申し上げますと、阿倍仲麻呂という人は大変な秀才だったのでしょう。十九歳の時、西暦で言うと七十七年に遣唐使の一員に選ばれて西安に行きます。西安で、今の時代なら大学に当たるところで勉強をしまして、大変優秀な成績で、当時の中国の高級官僚の候補生を選ぶための科挙という試験に見事合格しました。しかも唐の政府で働き出したところ、これが余りにも優秀なので、玄宗皇帝が「おまえはもう日本に帰らないでここにいろ」という話になって、ずっと玄宗皇帝に仕えて仕事をした人でございます。その当時の西安はまさに中国文化の都で素晴らしい人達がいきました。李白はほんの少しも生意気だったらしくて、ほんの少ししかいなかったのですが、阿倍仲麻呂は王維ですとか李白ですとか、そういう人たちと大変に親交を深め

ました。

中国では当時、阿倍仲麻呂は朝衡という名前で呼ばれていたようですが、故郷に対する想いはとても強い。「天の原ふりさけ見れば」という歌は、ちょうど南シナ海の海岸の近くにいた時に、「あっちが奈良だな。おれの故郷だな。今この上に輝いている月、あれは奈良でも三笠の山の上に出る月なんだろうな」と言って歌った望郷の歌です。その想いが強いというので、ついに玄宗皇帝が「それでは許そう。故郷に帰ってこい」ということになり、遣唐使を乗せてきた船の帰りの便に乗って日本を目指したのですが、船が難破いたしました。西安の都には「大変だ、阿倍仲麻呂、朝衡は死んでしまったらしい」という話の流れです。そのときに李白が心の友の阿倍仲麻呂の死を悼んで歌った歌が、興慶宮公園の碑に刻まれているもう一つの歌でございます。この歌は、故郷に帰るといつて出て行ったわが友人は南のあの青い海に沈んでしまったようだという悲しみを歌っております。もう一人

の友人王維は、阿倍仲麻呂が西安を出て奈良に帰ると聞いて、友達がそんな遠くに行ってしまう。これから先どうやって連絡をとり合ったらいいんだろうという、別れを惜しんだ歌を残しています。李白という王維といひ、唐代を代表する詩人達が日本人の阿倍仲麻呂のために素晴らしい詩を遺す。日中間にはこんなに美しい友情の物語があったことを知って私はただただ感激しております。

考えてみますと言葉というものは色々な意味で力があるなと思います。阿部仲麻呂の物語があったのは西暦七〇〇年代、ちょうど八世紀の中頃で日本は仮名が生まれていないか生まれて間もないかぐらいの時です。阿倍仲麻呂は「天の原」という歌を日本語で書いたと伝わっていますけれども、そのときに使った文字は、「阿麻能波羅」という漢字を連ねた万葉仮名だったようです。この万葉仮名を中国人に発音してもらいましたら、ほとんど「天の原ふりさけ見れば」と聞こえました。これは今、発音が違う」と言われた文

字が二つほどありました。いずれにせよ、漢字を使いながら音にしてあらわすという方法で日本語を守り、また日本語を文字として記録することを阿倍仲麻呂の時代の人はすでにやっていたようでございます。

何故こんなことを申し上げるかと思しきと、実は文字は日本に入ってくる、単に中国語のように表意だけではなくて、音でその文字を使うことから日本語をちゃんと表すということとその頃の人は始めていたということを描きたいからです。そして、中国で生まれ、日本で独特の進化をとげた文字が、阿倍仲麻呂と李白との友情を今に至るまで私たちにまで教えてくれるという意味も込めて、大変に嬉しいことでございます。

さて、中国から伝わった文字は、その後日本でどんどん変化して日本の平仮名に変わって行き、紀貫之の『土佐日記』になっていったわけです。こうした、万葉仮名から平仮名、その前に片仮名というのもあったわけですから、そのように文字

がどんどん変化して行くというプロセスは日本独自のことのようです。物の本によりますと、中国の方々は、どちらかというところ、漢字を崩すということをおぼろげに書道を通じてこれだけけれども、日本道の場合はほとんど、草書になり、そしていつの間にか、音だけを表すための平仮名に変化していったという話。何とすばらしいことでしょうか。

今から三千三百年ぐらい前の殷の時代に漢字ができたと言われておりまして、紀元前三世紀ごろ多分朝鮮半島を経て漢字が日本に伝わり、そして、その伝わった漢字が数百年すると日本独自の平仮名へと変わっていった、『土佐日記』になったというところではないかと思えます。

ここで、私がすごいなと思いますのは、紫式部です。エジプトの人類史を研究している学者の書いた本の中に、人類初の長編小説は、西暦一千年代に入ってから、日本で女性によって書かれたという記述がございます。『源氏物語』を人類初

の長編小説とするかどうかについては諸説ありますが、紫式部という女性が世界の文学史上にきんせんたく仕事をなさった。そのことは、だれの目にも明らかであろうと思えます。しかも、この小説『源氏物語』を書くのに使った文字が、でき上がった間もない平仮名であった。その平仮名は、『源氏物語』より少し前の多分西暦一〇〇〇年ちよどぐらいに清少納言が『枕草子』に使ったのも平仮名であって、平仮名という文字が日本の女性の才能を一気に開かせた。女手と言われるゆえんもそこにあるのかもわかりません。

以前杭迫先生からこんなことを教えていただきました。日本の歴史を振り返ってみると、女性の力が大爆発、大ブレイクしたときが三回ある。一回目が、女王卑弥呼が君臨した三世紀半ば、あの邪馬台国の時代。二度目が、紫式部、それから清少納言などが活躍した平安時代。そして、三度目は何と現代だと先生はおっしゃってられます。特に今、日本の政治はどうしようもない、経済も

外交もだめ。こうなると多分、日本の女性の間から「もう男じゃだめ。私たちの時代よ」とおっしゃって日本をリードしてくださる方々が出ているのではないか。最近、「草食男子」などという言葉をよく聞きますが、草を食べる男なんていう言葉が出るようになったのであれば、この際、改めて女性の大ブレイクを期待したいなど思ったりしております。何はともあれ、文字が変化しながら、実は女性の、というよりも日本文化の大きな花がその文字の力で開いたということは本当にすばらしいことだと思えます。

さて、日本に文字をもたらしてくれた中国ですが、最近こんな話を聞きました。キーワードは「動漫」、動く漫画って書きます。アニメのことです。日本のアニメのことだと思ってください結構です。実は、中国の若者たちの間で、日本の漫画ですとかアニメが今、大人気なのです。最近、北京大学で学生たちを集めて、なぜ日本の漫画やアニメにそんなにひかれるんですかというディ

スカッションをした方がいらっしやいます。もちろん中国でも、アニメはあるし、漫画もあるわけですから、その学生たちに対して、何故中国製はだめで日本製はそんなにいいのと聞いてみたわけです。そこで出た結論は、日本の漫画やアニメは人間の思いがそのまま表現されていて読む人見る人の心に直接訴えかけてくるものがある。それに引きかえ、中国のアニメや漫画は、教えてやろう、教訓を垂れてやろうといった押しつけがましさがひど過ぎて、読む気、見る気にならないというのが北京大学というエリート大学の学生が出した結論だったそうです。

中国語で言う動漫。この動漫にひかれる中国の若者たちのことを「動漫新人類」と名づけた方がいらっしやいます。筑波大学名誉教授の遠藤先生です。一九四一年中国の長春でお生まれになって終戦後もご両親とともに中国にとどまり、日本がサンフランシスコ講和条約で独立を認められたあとようやく日本に帰ってこられた方です。子供のころの記

憶は完全に中国のほうが強いっておっしゃっていますが、終戦から七年たって、大変な苦勞をして日本に戻り、大学院まで進まれて、何と理学博士の称号をおとりになる。筑波大学で私が存じ上げていたころは、中国からの留学生の面倒を見る留學生センターの所長も兼ねておられました。

遠藤さんは大学を退官された後も、研究のためによく中国にいらっしやって、中国の大学に滞在され、中国の現状について調べてたくさんのもも書いておられます。その中の一つに、北京大学とか清華大学という有名な大学に日本の漫画の研究サークル、部がつくられているという報告があります。遠藤さんはそれを見て、なぜ、反日暴動をやったり、反日デモをやったりする中国のあの若者、学生が、日本文化の代表格とも考えられる漫画、アニメ、コスプレ、Jポップと呼ばれる音楽にひかれるのだろうと考えられ、「中国動漫新人類」という本をお書きになりました。とてもおもしろい本です。

中国のことをよく知っておられる方だからお書きになれた本だということがわかります。

この本は二〇〇五年ぐらいの出来事を中心に書かれていますが、今どくなっているかについてはまた違う話があります。「クレヨンしんちゃん」という漫画をご存じでしょうか。一九九〇年に日本のコミック雑誌で連載が始まった人気漫画です。主人公は野原しんのすけ。五歳の幼稚園児で何しろ悪がき。両親や先生など周りが振り回されております。大変おもしろいのですが、時にはエロっぽかったり、いたづらしたり、悪だたり、暴力があったり、日本では子供に見せたくない漫画アニメの一つと言われたこともあります。この漫画は、実は世界に大変売れております。中国では『蜡筆小新』と書いて、上の二字はクレヨンです。小新っていうのはしんちゃん、小はちゃん、新はまさに音の新です。

ところが、このしんちゃんに大変なことが起きました。去年の出来事です。作者の臼井儀人さん、この方

は山歩きが大好きなのですが、去年、群馬県で一人で山に登っておられて、がけから転落して亡くなられてしまいました。この訃報は日本のテレビや新聞で大きく伝えられ、ネットにも臼井さんの死を悼む書き込みが相次ぎました。遠藤さんによりますと、中国では臼井さんが行方不明という段階からメディアが刻々とその情報を伝え、去年九月二十一日に遺体が発見されすと、臼井さんの逝去を惜しむ声がネット上に満ち満ちたそうです。例えば、中国共産党の機関新聞人民日報のネット版には二十一日までに何と二百項目以上の記事が載っていたそうです。中でも遠藤さんが注目されたのは「一路歩好」という文字です。歩は歩く、好はもちろんよいという。「一路歩好」というのは、あの世にいらっしやっても、どうか後の人生がすばらしいものでありますようにという意味を込めた惜別の言葉。ご冥福を祈るとか、故人を惜しむということを超えた、愛情のこもった、自分に非常に近い存在としての慈しみ、敬

愛する心が込められたこの言葉が臼井さんの死についてのいろいろな記事の中で使われている。その一例として引用されているものは、中国新聞網というメディアチャンネルの中の記事で、こんなふうに書かれています。超人気漫画『蜡筆小新』の作家・臼井儀人氏の逝去が伝わる時、網友たち、ネットを使って遊ぶ、網の友達と書きまますけれども、ネット族の人たちは深い悲しみに包まれ、沈痛をあらわした。多くの網友は皆一斉に「しんちゃんのお父さん歩好」、あの世でもすばらしいものになりますようにという、その言葉でたくさん書き込みをしていたそうです。

中国では一九八〇年以降に生まれた若者を八十后というそうですが、皆、この『クレヨンしんちゃん』を見て育った世代です。しんちゃんは悪ふざけが好きで、小利口で、いつもこずるく言い逃れをして、しかもちょっとエロっぽくて、中国の格式ある教育から言うところでも容認できないものであったかもしれない。しかし、漫画の中のこういう子供を見ている人々は、泣くに泣けず、笑うに笑えない気持ちで小新を愛してきていたのだという記事が載ったそうです。そこまで心のこもったメッセージが寄せられるような漫画とそ

の作者の死。中国だけに限りません。韓国の東亞日報のネット版に臼井さんの死を悼む記事が載り、ヨーロッパでも大変な数の記事になったそうです。遠藤さんはこうした現象を見て、「中国の若者たちだけでなく、世界の若者たちを、言語と文化と民族を超えて一つに結んだ臼井さんの功績をたたえたいと思う。そして、私も彼らと一つになって心からの哀悼の意を捧げたい」と結んでおられました。こうした世界中の若者たち、中には三十代、四十代の人もたくさんいたわけですが、世界四十数カ国で臼井さんの死が悼まれたという事実は大変なことだと思います。

日本の漫画やアニメがいかに世界で愛されるようになってきているかを示す、もう一つのイベントがあります。この中で紹介します。これはパリで毎年開かれていて今年で十一年目を迎えるジャパンエキスポという催しです。日本製アニメ、漫画好きだったパリの若者たちが、年に一度、自分たちで日本の漫画を楽しもうじゃないか」というので、コスプレも含めて、何しろやってみようと自然発生的に始まったものです。日本は全然絡んでいません。大使館も関係ない。フランスの若者たちが始めたイベントが、今年は七月一日から四日までパリのノールヴィルバントっていうところで開かれたのですが、何と、集まったのが十八万人。アニメ主人公の格好をした子もいっぱい集まってきたそうです。最初の年の入場者数は三千二百人しかいなかった。それでもそんなに集まったというので、みんなびっくりにしたのですが、何と十年間で入場者数が五十六倍にも膨れ上がるという大変な人気イベントになりました。

中で何をやっているのかといいますと、コスプレ、漫画、アニメ、音楽、日本の武道、生け花、お茶、それか

らたこ焼き、ラーメンなんていうものも売っています。カラオケもあります。日本の大衆文化と伝統文化、日本の今をありとあらゆる角度から紹介する、そんなイベントです。今一番人気があるのはコスプレですが、そういう状況が今パリで繰り広げられている。しかも、こういうイベントは何もパリに限られたわけではなくて、イギリスでもありませんし、デンマーク、最近ではアメリカでもあったという話が伝わっています。何かニューヨークでこういうジャパンフェスティバルが開かれたそうです。パリの出来事ですが、不思議な格好をした一人の若い女の子が列車に乗り込んできたのですが、ご本人はどこに行くのかわからない。車掌さんが心配になって、お巡りさんと呼んで聞いてみると「私、日本に行きたいの。こっちの方向に行けばいいでしょう」と言ったとか。そういう漫画好き、アニメ好きがものすごくふえているという話があります。

それはかりではありません。先日、

コロンビア大学のジェラルド・カーティスという大衆有名な、日本がご専門の教授が「最近自分のゼミを志望してくるアメリカ人の学生がふえている」と話しておられました。なぜか。アメリカ人も、東ヨーロッパ、中国、韓国などからの留学生も自分のゼミに来るようになった。よくよく聞いてみると、一番影響を受けているのは、日本のアニメと漫画であの漫画を早く日本語で読みたいから、この授業に来たんですと答える学生もいたそうです。何となくカーティス先生はあまりおもしろくない感じがしていましたが、そうした傾向は何もアメリカだけではなくて、世界中に広まっているそうです。それではこういうポップカルチャーとは一体何なんだろうかということです。日本のごく当たり前の若者たちが気に入って、どんどん広がってきた、いわば自然発生的に生まれたこの文化をポップカルチャーと言っているのですが、どうも日本のポップカルチャーには、日本とか日本の若者といった枠を超えて、ど

んとん世界に広まっていくだけの力があるという感じがいたしてなりません。そうすると外務省などといったしましては、「なぜか世界中で若者たちがあんなに日本のアニメ、漫画に熱狂するのだったら、漫画、アニメを親善大使にする手はあるんじゃないか」と考えたり、何とかしてこのポップカルチャーを、日本の国際社会における地位の向上とか、存在感の強化に役立てることはできないだろうかと策を練ったりするようになったのです。

事実、私も参加したのですが、二〇〇六年から七年にかけて、外務大臣の諮問機関であります海外交流審議会が、ポップカルチャーをいかに外交に利用するかということをはじめに審議いたしました。そこで出てきたのは、まず「ポップカルチャーとは何ぞや」という定義付けをしなければならぬ。その答えは、一般市民が日常生活の中で成立させている文化で、特に日本人の感性とか精神性があらわれてくるもの。つまり、等身大の日本人が伝えられるような

ものとなりました。ただ、何も今だけではなくて、浮世絵も華道も茶道も焼き物も、みなそれぞれ、その時代の最先端のポップカルチャーだった。今はたまたまアニメかもしれないし、コスプレかもしれない。いずれにせよ、そうしたポップカルチャーの中で、今、一番時代を切り開いていくような力と強い浸透力があり、これぞ日本というものをあらわすのにふさわしい、こうしたカルチャーを日本外交に活用しようではないかという結論が出ました。

じゃあ、一体何を使おうかというので出てきたのが、漫画とアニメ、そして日本食も含めた日本のいわゆる大衆文化。ファッションも含まれます。こういうものを世界にもっと広めることによって、日本という国が今までは、ソニー、トヨタといった商品ブランドネームで知られていたとしたら、それに加えて、これも日本なんだよ、あれも日本なんだよというようにどんどん日本の違った側面を見せることによって存在感が強まっていくことを期待し

たい。そのため少しでもお役所はお

役所なりにお手伝いをしようという  
ような形になってきたわけです。し  
かしその一方ではお役所の役割はあ  
まり考えないほうがいいという声  
も聞かれます。何しろポップカル  
チャーというのはあくまでも民衆、  
大衆のものであり、幸い今は世界の  
若者たちがこうしたものを気に入っ  
てくれている。クールな、日本語で  
言うところ、何でしょう、「いかす」っ  
ていうのでしょうか。「いいよ」と  
いう感じの、そんな文化だと思っ  
てくれている。だから、そこにあんま  
りお上がしゃしゃり出ていく必要は  
ないのではないか。お役所がすべき  
ことは例えば、海賊版が出ないよう  
にするための国際会議で日本が頑張  
るとか、国際的な著作権の保護、さ  
らに外国製の映画や音楽の輸入を禁  
止している国に対して日本のアニメ  
や漫画を輸入禁止にするのはおかし  
いではないかと申し入れ、できるだけ  
表現の自由、表現物の自由な交流  
を働きかけていくといった環境づく  
りをすべきだということになってき

ました。

この議論を聞いておりました、大  
変興味深いと思ったことが一つあ  
りました。それは何かと申します  
と、アメリカで日本のポップカル  
チャーがどのように受け入れられた  
かの具体例です。アメリカには大体  
一九六〇年代の後半から七〇年代に  
日本の初期の漫画、アニメが最初  
にテレビの中に入っていました。と  
ころが、かなり粗悪な品質のもの  
だったり、暴力的というか、かなり  
ひどいのもあったりして、その当時  
の子供たちは、テレビでそれを見た  
くても親からとめられて見るのが  
できなかった。ところが、今その当  
時の子供が大人になって、自分たち  
の子供が日本製のアニメや漫画をテ  
レビや雑誌で見るようになった。そ  
うなると、親たるもの、自分がノー  
と言われたものを子供にノーと言っ  
たりなどということはないで、かなり  
自由に見せるようになってきた。そ  
こで、特に九〇年代から二〇〇〇年  
代に入ると、アメリカ国内では日本  
製のアニメ、漫画が、爆発的と言っ

ていい程に街にあふれるようになって

てきたというのです。私の息子が今、  
ワシントン郊外に住んでおりますけ  
れども、その家の近くの本屋さん  
行くと、日本製のコミック本を入れ  
た書棚が、最初のうちは一つだった  
のが、今は二つ三つとどんどんふえ  
てきて、立ち読みをしたり、椅子が  
ちゃんと座って読んでいる子がたく  
さんいます。「ああ、ここまで来た  
のか」と思いますけれども、そんな  
ような時代になってきました。

このエピソードはアメリカで日本  
製のアニメ、漫画が受け入れられる  
ようになるためには、世代を一つ越  
える必要があったことを物語ってい  
ます。最初は親はノーと言って子供  
たちは見る機会があまりなかった。  
しかし、その子が親になって初めて、  
わーっと漫画やアニメが見られるよ  
うになった。つまり、随分息の長い  
取り組みと、その間に少しずつ中身  
を良くしていくという努力が重なっ  
てそうなったのです。例えば宮崎駿  
さんのアニメがアカデミー賞をとっ  
たりするような時代になるというこ

とにつながっているのだと思いま

す。そう考えますと、こういう文化  
を例えば外交に生かしていこうとす  
るなら随分息の長い取り組みが必要  
になるという感じがいたします。そ  
うした取り組み、これを外務省や内  
閣府では文化外交という言葉で表現  
しておりますけれども、外務省には  
広報文化交流部というセクションが  
ありまして、外郭団体の国際交流基  
金と一緒に日本の文化外交を担当す  
ることになっています。何をしてい  
るかというところ、日本の文化を世界に  
広めて、各国の人々の間に日本への  
理解と親近感を増進し、日本ファン  
をふやすこと。実は、私が担当して  
おります日本国際放送も、つまりは  
これでございます。等身大の日本の  
情報を、できるだけたくさん世界に  
伝えて、日本を理解してもらい、あ  
わよくば、テレビを見ている人たち  
をいつのまにか日本ファンにする。  
それによって、少しでも日本の国際  
的なプレゼンスを上げ、仲良しの人  
たちがふえることを目指そうではな  
いかと考えているわけです。



お聞きになったこともおありかと  
 思いますが、アメリカのハーバート  
 大学にジョセフ・ナイというものす  
 ごく頭のいい先生がいます。ケネ  
 ディスクールという、行政学とか国  
 際政治を専門に行う大学院の学部の  
 学長です。実はこの方、私がワシン  
 トン特派員をしていましたころ、国  
 務省の国務次官補というナンバース  
 リーのポストで、原子力の利用につ  
 いてのアメリカの考えを世界に広め  
 るということをしておりまして、日  
 本がフルトニウムを使うことにつ  
 いてものすごく警戒心をもって臨ん  
 できていました。取材に行ってもか  
 なり日本に敵しかったので、私にし  
 てみれば、難しい先生だな。日本に  
 はもう少し優しくしてくれてもいい  
 じゃないかと思うた人なのです  
 が、今や、ハーバード大学ですばら  
 しいお仕事をなさっています。

そのナイ先生は外交についてこん  
 なふうになっています。外交はいろ  
 いろな力を使うが、軍事力だとか経  
 済力はハードパワー。これはまさ  
 に、旧来の外交を進める上で最も必

要な力だった。軍事力の強いところ  
 は強いし、経済力があるところ  
 は、それを使って世界を動かしてい  
 けば良い。自分になびかせれば良い  
 わけだ。いずれにせよ、恐怖心を与  
 えるか、それとも迎合させるか、そ  
 のどちらかでやっていくのがハード  
 パワー。ところが、冷戦が終わった  
 ら、ハードパワーだけの時代も終  
 わってしまった。それよりもその国  
 が今までもずっと積み上げてきた歴史  
 と文化。それからその国の発信力。  
 自国の主張をどうやって世界に広め  
 ていくかという、その力が問われる  
 時代、そうした力をナイ教授はソフ  
 トパワーという言葉で表現いたしま  
 した。このハードパワーとソフトパ  
 ワーをうまく使いこなすスマートパ  
 ワーという力を身につけた時に、そ  
 の国の外交力が本当の意味で発揮さ  
 れるようになるんだというのがジョ  
 セフ・ナイさんのご託宣です。まさ

にこのソフトパワーっていう力を抜  
 きにして一国の外交力は凶れない時  
 代になってきた。どのようにしてこ  
 のソフトパワーを強めていくかをめ

ぐって、今、世界各国が競い合っ  
 るところです。

例えばの話ですが、アメリカは世  
 界で一番力のある、最強の軍隊を  
 持っていて、しかも、やせても枯れ  
 ても、アメリカは世界最大・最強の  
 経済大国であるわけです。軍事力、  
 経済力、これを持っているのですが、  
 例えば中東で、アフガニスタンで、  
 アメリカの外交は一向に思うに任せ  
 ない状態が続いています。中国に対  
 しても、なかなかアメリカが思うよ  
 うな中国の反応を得られないで苦勞  
 しているわけです。そこでアメリカ  
 は何をしているか。一例ですが、ア  
 メリカはイラク戦争の直後から、首  
 都ワシントン近郊に二十四時間の国  
 際テレビ放送局をつくって、アラビ  
 ア語の放送をワシントンから中東地  
 域に送り届けるという仕事を始めて  
 います。アラブ全体に向けてニュー  
 ス、娯楽番組、これを連日放送して、  
 少しでもアメリカの考え方を理解し  
 てもらおう、アメリカに対する敵対  
 心をなくしてもらおうという努力を  
 しています。ことほどきように、大

国アメリカといえども人々の心に訴  
 えかけるといふ、ソフトパワーの行  
 使に当たっては大変な苦勞をしてい  
 る。これはアメリカに限ったことで  
 はなくそういう状態は世界の至る所  
 で見られます。特に日本のように、  
 軍事力は専守防衛、守るだけの力し  
 か持たず、経済力とは言えば、世界  
 第二の経済大国だったのが、今年  
 間違いなく中国に抜かれて世界第三  
 位。一九九〇年代から二〇〇〇年代  
 の初めにかけては世界一だと豪語し  
 ていたO.D.A 対外援助は今、世界ナ  
 ンバーファイブで、そのうちにさら  
 に落ちていくんじゃないか、イタリ  
 アにも負けてしまうと言われるよう  
 な時代になってる中で、日本のハー  
 ドパワーには限界があって、もうこ  
 れ以上使うわけにいかない。だとし  
 たら、使えるのはソフトパワーだろ  
 う。こうなってくるわけです。

それでは何を頑張るか、どうやっ  
 て日本のソフトパワーに磨きをか  
 け、もっと魅力的なものにするか  
 ですか。そうしたことについての専門家  
 がいいます。フランス人のジャン・マ

リー・ブイスさんという方です。彼はフランス国立政治学財団附属国際問題研究所という研究機関の研究ディレクターをしますが一九七五年から十五年間、日本に住んで日仏学院などでフランス語を日本に普及する仕事をしておりました。それをしていくうちに、フランス文化を日本にとりだけではなくて、日本文化をフランスがどう受けとめているか調べてみようと思ひ立ち、フランスに戻られてから、日本の漫画がフランスでどのように受け入れられているかについての学問的な研究を続けています。

ブイスさんによりますと、フランスには、今何と数百万人の日本漫画ファンがいる。さっきのパリのジャン・エキスポのことを思い出していただくと、あそこに十八万人集まったというのは決して偶然や数え間違いではない。これだけの底辺があるからあれだけ集まってくるのだというところになるかと思ひます。実は、日本語はフランスで翻訳される外国語の第二位。トップは英語だそうで

すけれども。翻訳される日本語の本の中で八割は漫画だということ、これは喜んでいいのかどうかわかりません。いずれにせよ、そのくらい浸透しているようです。こうしたことを踏まえるとフランス人にとって日本はクールな国、つまり、いかす、すてきな国になってきているとブイスさんは言います。ブイスさんの報告の中にこんな話がありました。

一九七〇年代まで、フランス人にとっての日本は、どちらかというと暴力的な国であったようです。第二次大戦の記憶がまだ色濃く残っていて、特に五〇年代、六〇年代の子供向けの絵本の中で日本についてどんな絵が出てくるかという、特攻隊、切腹がもっぱらで、それに加えて遠い国、伝統に縛られたがちの国といったイメージが広がっていたようです。しかし、日本のポッパカルチャーが広まるにつれて、日本のイメージが大きく変わってきて、人々の日本に対する親近感が増してきた。おもしろい国、創造力のある国、魅力的な国、伝統だけに固

執しない自由な面がある国、エネルギーに満ちた国といった印象を持つ人がふえてきたようです。ブイスさんは「日本は格好いい国になった。まさにクールジャパンの誕生だ」と言っています。ただ、さはさりながら、この親しみが、日本外交の応援団につながるかというと、必ずしもそうではないとブイスさんは言います。

親しみが増したからといってそうしたフランス人が必ずしも日本という国家そのものの支援者になるわけではない。このところが肝心でありまして、これから先も日本はソフトパワーで、できるだけフランス人への働きかけを続け、親しみを持ってもらおうと努力するだろうが、フランス人に日本という国を支持するようにはさせるためには、ソフトだけではなくて、もう一つ、それを超えて日本が国際社会の中でこんないいことをしているといった具体例を見せる必要がある。彼はそんなふうに言っています。言いかえれば、ソフトパワーは確かに外交の有効なツールではあるけれども、しかし、ソフトパ

ワーには限界がある。これからの日本はそのところをよくわきまえて生きていくべきだという、そんな話をしてくれています。

それでは一体、日本にとって、このソフトパワーっていうのは何なんだろう、ほかにまだまだ役に立つものがあるのではないかとということで、最近、日本政府がとても注目しておりますのがコンテンツ産業。つまり、ソフトを使った産業を盛り立てて日本のソフトパワーの力を一段と高めるとともにあわよくば、日本の経済の再生の大きな原動力になってほしい、そんな期待です。ソフトパワー産業といえますと、アニメ、漫画、映画、音楽、書籍、ゲーム、コンピューターソフトなど、色々ものがあります。現在、国内外での売上高が大体十五兆円あると言われています。この十五兆円をこれから先、一生懸命育成し、さらに活発にやっってもらうことによって、二〇二〇年には二十兆円産業にしたいというのが日本政府の期待であります。これを実現するために

は、国内でもっともっとみんながソフトを利用してくれることが必要ですが、そればかりではなく、海外での売り上げをもっと伸ばしたい。

今、日本のコンテンツ産業の海外での売上高は約七千億円ですが、これを二兆三千億円にしたいというのが経済産業省のもくろみです。もしこれが実現できれば、現在の産業にかかわっている雇用数三十一万人が二〇二〇年には三十五万人にふえるだろうと言われています。三十五万人、ほんの少ししかふえないじゃないかとお思いになるかもしれません。が、今、アニメの下絵をかく人、漫画の下絵をかく人、実際にこの産業でコンピュータのゲームのソフトを一生懸命つくっている人たちは決して高給ではありません。かなりの低賃金で働かされている人が随分います。それにもかかわらず、その仕事で中国、韓国にどんどん流出してしまっているということもあります。三十五万人という数字には雇用の拡大とともに一人当たりの売上高がふえることによって、コンテンツ

産業に従事する人たちの待遇もよくなってほしいという願いも込められた、そんなデータです。

しかし、ことはそう簡単ではありません。世界多くの国々、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、もちろん中国、シンガポール、こうした国々が自分たちのコンテンツ産業に力を入れ、大幅に伸ばそうとしています。考えることは大体同じです。この分野がこれからの輸出産業、そして国内の雇用創出の目玉だということで、税の控除ですとか補助金ですとか、アニメ団地の創出といったような形で、各国が一生懸命支援策を講じています。その競争の中でどうやって日本が勝ち進んでいくか、これが問われます。勝ち進んでいくためには、やはり中身ということになります。

そこでご紹介したいのが、村上隆さんという、今世界で売れている日本人のアーティストです。パリにいらっしゃる方がいらっしゃいましたら、来月十二月の十二日まで、ベル

サイユ宮殿で村上隆展という展覧会をやっていますので是非おでかけ下さい。宮殿の正面でカップパのような金色の像が迎えてくれます。何しろ、村上隆さんがおつくりになる像はポップアート、何がなんだかよくわからないのですが、この作品が世界で大ブレイクしています。あのルイビトンのハンドバック、白地にルイヴィトンのマークがあって、そこに何か花模様みたいなのがばーって散っている。あれは村上隆さんとルイビトンのコラボレーションでできたものなんです。六本木の六本木ヒルズ行きのバスに、ヒマワリの顔がスマイルマークになったバスがやってまいりますけれども、あれも村上隆さんです。

驚いたことに、村上さんは、東京芸術大学の日本画科をとお出になつた。うわさでは首席で卒業できなかったのが不満らしくて、突然、ポップカルチャーの方にだーんとジャンプして大活躍中ですが、何と彼がつくったキャラクター・フィギュアがニューヨークのオークションで

十六億円で売れたんです。これはポップカルチャー、ポップアートのオークションでついた史上最高値で、彼はそういう意味でも世界で有名になっています。今、ベルサイユ宮殿では鏡の間などいくつもの部屋に巨大、カラフル、金色、さんぜんといった色々な村上作品がいっぱい展示されていますが、観客の反応は半々だそうです。「私はマリーアントワネットの時代のものを見に来たのに、何よ、これ」って言って怒り出すお客と、それから、「うわあ、すごい、おもしろい」と喜ぶお客の二種類だそうです。実は、フランスにもこういうものは大嫌いという人たちが出て、「絶対にこんなものを置くべきではない。フランスの伝統に対する冒瀆だ」と右派のグループがデモをしたり、ベルサイユ宮殿を建てたルイ十四世の末裔の人たちは

とんでもないことをやってくれたというので、裁判を起したりしているそうです。これに対して村上隆展を企画したベルサイユ宮殿美術館の責任者は「あんなこと言っているが、

構わない。あれは反対派のノスタルジーのようなものでしかない。そもそもベルサイユ宮殿は、十七世紀に建てられたときに、十七世紀のポップアートをふんだんに盛り込んだ宮殿として建てられたもので、フランスにはそういう新しい芸術や大衆芸術をどんどん取り込んでいくという素地があるのだ」と言って、「村上作品に違和感はなくなく、良いものだ」と言っているそうです。この村上隆展。日本のポップアートが世界を席巻していることを示すすごい出来事だということで、日本ばかりでなく、欧米でも大きく伝えられています。

その村上隆さんが二〇〇六年に『芸術起業論』という、彼自身の顔を表紙にした本を出版しています。とてもおもしろく、かなり挑戦的な本ですが、この中で村上さんはこんなことを言っています。今、世界の美術市場で通用する日本の美術作家、アーティストは五人に満たないのではないかと。なぜか。それは今、欧米にはアートのマーケットを支配

する原則があるのだが日本の作家、画家、彫刻家などのアーティストの中で、そうした欧米のマーケットを支配する原則を本当に理解して、それを意識して海外に進出しようと考えている人がほとんどいないから。欧米のマーケットでは、ルールを踏まえない自由は評価されない。つまり、作品をどんなにきれいに、くっても、それだけでは高くは売れないということ、ちょうど華道や茶道で作法に反することは許されないし、否定されることになるということと同じだ。それとおなじようなことは西洋美術の世界にもあり、特に東洋人であるわれわれがそのことを理解するためには、西洋美術史に脈々と流れている文脈をちゃんと理解して、そこにあるいわば不文律のようなものを十分にわきまえる必要がある。そこをわきまえた上で独創性を発揮すれば、必ずや欧米のマーケットで成功する。これが村上隆さんのご託宣で、芸術起業論という本は、そういうことを日本に伝えようとするメッセージであるようです。

村上さんはこんなふうにも書いています。「日本の芸術家の皆さんはもっと商売意識を持つべきだ。その部分が足りなくて、芸術を純粋無垢に信ずる姿勢をとり続けるのであれば、それは芸術家ではなくて趣味人で終わることになる」かなり挑戦的で反対派からは「コマーシャルイズムに淫したあの村上隆はアーティストの風下にも置けない」などという厳しい批判も出ています。しかし、ポップアート、ポップカルチャーなどのコンテンツを商売にして生きていくのであれば、そして、日本政府全体が応援して、これを日本産業の一つの大きな柱にしようと考えているのであれば、欧米のマーケットにどう入っていくか、欧米のマーケットでどう成功するかということをもっともっと考える必要があることは明らかです。実際にそういうことをやり始めている方はいっぱいいらっしゃいます。何しろ、日本のソフトパワーには、すばらしいものがあります。先ほど来申し上げているように、いにしへの昔、文字を中国から持って

きた。確かにオリジンは中国かもしれない、あの亀の甲羅に文字を書いた殷の時代の中国の人たちだったかもしれない。しかし、それが流れ流れて日本に来て、この日本列島という、東洋の一番東の端の、この先はあとと大海原というところで定着すると、それがどんどん昇華していつてすばらしい芸術作品を生み、そこから次々と新しい文化が生まれて来る。ポップカルチャーも同じです。

最近日本で「書道ガールズ」という楽しい映画が封切られました。ちょうど一週間前、先週月曜日なのですが、私が担当しております日本の発の英語のテレビ国際放送で佐賀の高校生が地元のショッピングセンターで巨大な和紙の上に、ローマ字と日本の文字とを太い筆で書くパフォーマンスをして買い物が絶賛するという、そんなドキュメンタリー番組を放送いたしました。また、これも最近の話なのですが、ジャパノロジーという日本文化を海外で紹介するかなりレベルの高い文化番組で「仮名」という三十分の番組を全

世界に向けて放送しました。日本の、文字がどのように変化してきたか。その番組の一番最後には最近の女の子たちが使う丸文字、全部丸く丸く書かれていく文字を紹介して、文字のそういう丸さが、最近のコンピュータやプリンターのフォントの中に生かされるようになってきている。つまり、漢字から生まれてきた仮名文字が女性たちの手で少し丸みを帯びた不思議な字になってきたなど思ったら、それが普通に使われる日本語のフォントに生かされるようになってきた。つまり、大きな流れの中で次々と変化が起きて日本に入ってきた文字が今もなお進化しつづけていることを紹介する、大変おもしろい番組でございました。

皆様もご承知のように、今、町の本屋さんに行きますと、雑誌の『サライ』と『和楽』の特集は書ですし、私の娘が結婚した相手はお役人なのですが、土・日は朝から書道教室に通ってしまっ、娘は「私ゴルフ・ウイドウではなくて、書道ウイドウなんです」って言ってます。彼

に聞きましたら、一年半ほど前に入ったときは生徒が五人だったのが今、二十五人になっているそうで、書道の復権はすさまじいようです。本当にすばらしいことだと思えますし、また、そうしたものをとても大事だと思ふ日本人がふえているというところは本当にうれしいことであると思っております。特に私の世代のように、幼い頃はいつもおなかがすいてましたし、遊ぶものといったら、焼け跡で空の焼夷弾を見つけてきて投げっこしたりした、そんな記憶がある者からいたしますと、今の日本で、若い人たちを中心にごんごん新しいカルチャーが生まれていることは素晴らしい。いい時代になったなと本当に思っています。

これをもとに世界の人たちに日本のごことをもっと知ってもらって、もう少し好きになってもらう。日本の活動の場が広がれば広がるほどそこからまた新しい日本の文化が生まれてくる。本当にすばれている人たちがごんごん世界に出ていけばいいし、私のように書をやってただめ、

音楽をやってもだめだということ人間も、応援団としては声を限りに応援し、また、いろんな機会に見に行ったり聴きに行ったりすることです。ポートをして、底辺を広げることができると思えます。そのことが日本のソフトパワーをごんごん強めていくゆえんだと思えます。何しろ、日本のコンテンツは、歌舞、音曲から物語、戯画、浮世絵、千年を超えた本当にすばらしいクリエイション、創造の積み重ねがあって出来ていると思えます。それに加えて、日本には豊かな自然があります。地方の文化は大変多彩です。表現の自由について言えば、ノーベル平和賞をとっても賞を受けられないというごかの国と違って、表現の自由のレベルからいったら本当に世界最高水準のこの国です。しかも、豊かで、目が肥えた、巨大な消費市場がありま

す。まさに、国内マーケットは世界最高水準。それに加えて、最近はずロードバンドが普及し、新しいコンピュータが安く買えるようになってきた。ネット環境としても世界の最高

レベルを誇っています。三千万人を超える人たちが今、超高性能の情報処理端末を使っています。携帯もそうですし、コンピュータもそうです。しかも、町の中をそういう人たちが自由自在に動いている。そういう意味ではクリエイション、創造を行う環境としては多分世界で最も条件のいい環境が今、日本にあるんだらうと思えます。

そうしたことを考えますと日本という国はソフトパワーをさらにさらに高めていくことのできるすばらしい国だと思いますし、多分、仮名文字で『源氏物語』を書いた紫式部さんが今生きておられたら、「あたし、コンピュータを使って、もっといい文章を書いてみるわ」っておっしゃるかもしれない。そういうすばらしい国であればあるほど、私たちが期待するのは、ソフトパワーを使って日本をもっともっと魅力あふれる国に行きたい。そんなことを祈っている次第でございました。

御清聴ありがとうございました。